

## 看取り期にある特別養護老人ホーム入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践

(特別養護老人ホーム／熟練看護師／看取り期／食事支援)

鎌田麻美<sup>1)</sup>・加藤真紀<sup>2)</sup>・竹田裕子<sup>2)</sup>・原 祥子<sup>2)</sup>

### Nursing Practice of Skilled Nurses in Comprehensive Meal Support for Nursing Home Residents During the End of Life

(nursing home / skilled nurses / the end of life / meal support)

Asami KAMATA, Maki KATO, Yuko TAKEDA, Sachiko HARA

【要旨】本研究は看取り期にある特別養護老人ホーム入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践を明らかにすることを目的とし、看取りケアを実施している特養勤務年数5年以上の常勤看護師8名に対し半構造化面接を実施し質的記述的分析を実施した。看取り期にある特養入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践として、【好きな食べ物を味わえるように丁寧に把握し続ける】、【食事が摂取できるかどうかその都度見極める】、【食べたいものを食べられるように段取りをつける】、【食べることを継続できるように多職種と連携する】、【施設の日常とは異なるひとときを演出する】、【状態に応じた食事をニーズに沿って提供する】、【好きな味わいを何らかの形で感じてもらう】の7つのカテゴリーが抽出された。そして、入所者の意向に沿いながら食べることを叶えつつも食べる限界を見極める実践が必要であることが示唆された。

#### I. 緒 言

特別養護老人ホーム（以下、特養）は、在宅での生活が困難な中重度の要介護者を支える施設であり全国に8,306施設、定員数 576,442人<sup>1)</sup>とその数は年々増加している。特養の看取りは、近い将来、死が避けられないとされた特養入所者に対し身体的苦痛や精神的苦痛を緩和・軽減するとともに人生の最期まで尊厳ある生活を支援すること<sup>2)</sup>とされている。特養入所者は食べられることを生きていることの証とする一方、自分で食べられない、おいしく食べられないことは命の終わりが近づいていることのサインと捉え、その自然の流れに抵抗せずに従っていきたいという望みを持っており<sup>3)</sup>入所者の食べることを支える支援は人生の最期まで尊厳ある生活を送るための重要な支援の一つと考える。

特養の看取り期の食事支援では、看護職が専門的知識

とケアマネジメント能力を発揮することが誤嚥等のリスクを減少させ喜び・楽しみの援助としての意味が深まる<sup>4)</sup>ことが明らかになっており看護職の担う役割は大きいと考える。しかし、特養看護師は入所者100人に対し常勤換算3人の人員配置であるため外部研修や長時間にわたる研修受講が難しい状況にあり<sup>5)</sup>それぞれの経験知に基づいた看取り期の食事支援に取り組んでいると推察される。熟練看護師に関する先行研究では、熟練看護師は複数の推論や看護行為の選択肢をもち、自分の判断を常にモニタリングしチームに働きかける判断がある<sup>6)</sup>ことが明らかになっており、特養での看取り期における食事支援の経験が豊富な熟練看護師においても、経験から積み重ねられた質の高い看護実践能力を持ち合わせているのではないかと考える。しかしながら、特養の熟練看護師を対象とした看取り期における食事支援については具体的に明らかにされていない現状があり、その実践をまずは明らかにすることが必要であると考えた。

そこで、本研究では特養の熟練看護師の看取り期の食事支援における看護実践にはどのようなものがあるのか、その看護実践を明らかにすることを目的とする。このことにより、特養の看護師の看取り期における食事支

<sup>1)</sup> 出雲医療看護専門学校

Izumo College of Medical Nursing

<sup>2)</sup> 島根大学医学部 地域・老年看護学講座

Department of Community Health and Gerontological Nursing,  
Faculty of Medicine, Shimane University

援について示唆を得ることができると考える。

## II. 研究目的

看取り期にある特別養護老人ホーム入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践を明らかにする。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン：質的記述的研究デザイン

### 2. 研究対象者

研究協力の同意が得られた特養勤務年数5年以上の常勤看護師8名

### 3. データ収集方法

研究対象者に60分程度の半構造化面接を行った。看取り期にある入所者の生を全うしてもらえるように取り組んだ食事支援に対し、「看取り期にある入所者の食べたい気持ちや食べる意欲をどのように見極めたのか、そのうえでどのような食事支援を行ったのか」を中心に尋ね、基本情報として年齢、勤務経験年数について情報を得た。対象者の承諾を得てICレコーダーに録音した。

### 4. 分析方法

逐語録の内容を精読し看取り期の特養入所者に対する食事支援について語られている箇所を文脈単位で抜き出した。可能な限り研究対象者の言葉を用いて簡潔な表現にまとめることでコード化し抽象度を上げながらカテゴリー化を進めた。分析の全過程において老年看護学と質的研究の経験を有する指導者からスーパーバイズを受け解釈の信頼性、妥当性の確保に努めた。

### 5. 倫理的配慮

研究対象者に、研究の目的、方法、倫理的配慮について文書を用い説明し同意書への署名にて同意を得た。研究協力は自由意思であり研究参加を拒否できること、一度同意しても途中で撤回できることを保証した。本研究は島根大学医学部看護研究倫理委員会において承認（第363号）を得て実施した。

## IV. 結 果

### 1. 対象者の概要

対象者は女性8名で平均57.4 (SD 5.4) 歳、特養勤務年数は平均16.6 (SD 5.6) 年であった (表1)。インタ

表1 対象者の概要

| 対象者 | 年齢   | 経験年数 | インタビュー時間 |
|-----|------|------|----------|
| A   | 50歳代 | 21年  | 55分      |
| B   | 50歳代 | 10年  | 58分      |
| C   | 60歳代 | 24年  | 52分      |
| D   | 50歳代 | 14年  | 53分      |
| E   | 60歳代 | 20年  | 52分      |
| F   | 60歳代 | 10年  | 63分      |
| G   | 60歳代 | 11年  | 58分      |
| H   | 40歳代 | 23年  | 61分      |

ビュー時間は平均57分であった。

### 2. 看取り期にある特養入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践

熟練看護師の看護実践として101のコードが抽出され、19のサブカテゴリー、さらに7つのカテゴリーに集約された (表2)。

以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉内に示す。また、代表的な対象者の語りを「 」で記載し、〔 〕内のアルファベットは対象者を表す。前後の文脈で理解しにくい箇所は ( ) 内に言葉を補足した。

#### 1) 【好きな食べ物を味わえるように丁寧に把握し続ける】

##### (1) 〈入所者に好きな食べ物をあらかじめ聞いておく〉

「軟飯で食べてる人がおはぎを食べたいって。(中略) その人は何が好きだったのかをまだ元気な頃に知っておくとかね [E]」と、食べる機能が低下していたとしても形態を工夫すれば食べることができることから入所者の好きなものを前もって確認する実践を行っていた。

##### (2) 〈好きだった食べ物を家族に確認する〉

「家族に説明する際に、これが好きだったと聞いてますけど他にないですかという感じで [H]」と、改めて家族に尋ね、看取り期に入っても少しでも好みの食べ物を提供できるよう確認する実践を行っていた。

##### (3) 〈好きな食べ物を多職種で探る〉

「こういう味がお好きだということを (中略) みんなで見つけていくという感じです。若い時は好きでも食べない方もおられますし [G]」と、好きな食べ物を味わえるよう多職種で入所者の好きな食べ物を探る実践を行っていた。

#### 2) 【食事摂取ができるかどうか都度見極める】

## (1) 〈食べる機能の変化を捉え食べる能力を見極める〉

「終末期と言っても低下期、不安定期に入られたかどうかのところの見極めの中で最大限味わせるものをどう食べていけるかは食支援のポイントになったりするんですけど〔F〕のように、熟練看護師は看取りの経過の中で食べる機能の低下を捉えながら食べる能力を見極める実践を行っていた。

## (2) 〈覚醒状態に合わせて食べるタイミングを見極める〉

「(覚醒状態やタイミングを図るには) 本人に聞くんですよ。目を開けておられれば『(食事に) 行ってみる?』みたいな。(中略) (食事時間だけではない)〔F〕と、熟練看護師は食事時間以外でも覚醒状態を確認しながら食べるタイミングを見極める実践を行っていた。

## (3) 〈摂食状況から食べられる限界をその都度見極める〉

「今、食事にエネルギーを費やせるかどうか、その見極めは必要かなと思うので〔F〕と、入所者の食べられる限界をその都度見極める実践を行っていた。

## (4) 〈全身状態から食べる能力を見極める〉

「覚醒だったりバイタルも測って今日だったら大丈夫かなとか、口からは無理だなんて時があるので全体の見極めですかね〔D〕と、入所者の摂食状況だけでなく今の全身状態をアセスメントし食べる能力を見極める実践を行っていた。

## 3) 【食べたいものを食べられるように段取りをつける】

## (1) 〈食べたいものを食べられるように意向とリスクを共有する〉

「本人が(危険性を伝えた上で食べたい) 言うなら家族さんをお願いする。危険性もあるけど家族さんもわかりましたみたいなところが大事な〔E〕と、入所者が食べたいものを食べてもらえるように家族と入所者の意向とリスクを共有していた。

## (2) 〈好きなものを食べることができるよう家族の協力を得る〉

「家族さんも心配されるのでこうですよって(伝えて)。どんなものが好きでした?と聞いて、これだったら昔食べてたみたいなの。(中略) それを持ってきてもらって〔E〕と、入所者の状況を家族に伝えながら昔好きだったものを食べることができるよう働きかける実践を行っていた。

## (3) 〈食べたいものを食べられるように味や食材の調

整をつける〉

「全体見ながらどうしたら実現できるかという話をして。誰がどうするかお餅をどこから用意するとか、どんな味にするとか〔D〕と、入所者の食べたい希望を叶えるために多職種と調整し実現に向けて段取りをつけていた。

## (4) 〈食べたいものを食べられるように食形態の工夫を凝らす〉

「ミキサー食を食べている方で(中略) 好きなラーメンを上手に食べられるんですよね。それを楽しみにしとられて(中略) ちょっと軟らかくしたり(中略) 短めにしてスプーンなんかですくえるようにして〔E〕のように、入所者が好きなものを安全に食べることができるよう形状や硬さを整える実践を行っていた。

## 4) 【食べることを継続できるように多職種と連携する】

## (1) 〈多職種と情報共有し検討を重ねる〉

「(嘱託医に) 相談して可能なら(向精神薬等を) なくしていく。(中略) 精神科の先生も『この薬は嚥下が悪くなる薬だからね』って。なくすとやっぱ食べられるようになるから〔H〕と、熟練看護師は食べる能力にマイナスの影響をもたらす側面を極力減らせるよう嘱託医に相談する実践を行っていた。

## (2) 〈介護職をサポートすることで入所者の食べることを支援する〉

「私達は介護士さんを全力サポートする立場にあると思っていて。看護師主体ではないので。(中略) だからよく相談にのってますよ〔H〕と、入所者の食べることを支援するために生活全般を支える介護職のサポートをするという実践を行っていた。

## 5) 【施設の日常とは異なるひとときを演出する】

## (1) 〈家庭での生活を思い出せる食事を提供する〉

「食事が食べれなくても家族さんが持ってきたおはぎみたいなものや煮しめとかは食べたりね。なので時々おやつとして。大根煮たり白菜のお浸ししたり〔E〕と、入所者が差し入れられた煮しめ等を食べる様子から施設でも家庭的な味を提供することで入所者の食べる意欲につなげていく実践を行っていた。

## (2) 〈特別感を感じてもらえるように好きな食べ物や茶器で演出する〉

「家でお茶と煎茶とお饅頭を楽しんでおられた人。ちょっと高価なものが好きな方がいらっしやい

表2 看取り期にある特別養護老人ホーム入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践

| カテゴリー (7)               | サブカテゴリ (19)                                       | 代表的なコード [対象者]   |
|-------------------------|---|---|
| 好きな食べ物を味わえるように丁寧に把握し続ける | 入所者に好きな食べ物をあらかじめ聞いておく                             | 入所者が食べたいものを食べることができるように入所者の元気な時に好きな食べ物を把握しておく [E]<br>入所時に食べ物の好き嫌いを聞いておくことで好きな食べ物を提供する手掛かりにする [H]  |
|                         | 好きだった食べ物を家族に確認する                                  | 家族に昔好きだった食べ物を聞く [E]<br>入所者の好きな食べ物について新たな情報がないか家族に改めて確認する [H]  |
|                         | 好きな食べ物を多職種で探る                                     | 以前の食生活を把握しながら、入所者にとってどのようなメニューが食べる意欲につながるのか多職種で検討する [E]<br>入所後の生活の中で好きな味を情報共有して食べられるものを見つけていく [G]   |
|                         | 食べる機能の変化を捉え食べる能力を見極める                             | 食物残渣の量や飲み込むまでの時間の長さ、食欲のなさなどの変化を看護・介護・厨房で確認する [A]<br>看取りまでの経過のその時々で入所者が最大限味わえるものをどう食べていくことができるかを見極める [F]   |
| 食事が摂取できるかどうかその都度見極める    | 覚醒状態に合わせて食べるタイミングを見極める                            | 会話ができること・開眼していることといった入所者の覚醒状態から食べるタイミングを見極める [D]<br>入所者に「どうする?」「行ってみる?」と直接声をかけ覚醒状態を確認しながら食べる意欲を確認する [F]   |
|                         | 摂食状況から食べられる限界をその都度見極める                            | 入所者が今後長くご飯を食べることができるように入所者の全量摂取を目標とせずムセがあればその都度中断する [A]<br>看護職は入所者が食事にエネルギーを費やせるかどうかを見極める [F]   |
|                         | 全身状態から食べる能力を見極める                                  | 少しでも食べることができると入所者の覚醒状態や全身状態をその都度見極める [D]<br>咀嚼や嚥下の状況・嚥下後の咳込みや咽頭ゴロ音の状況とその後の全身状態から食べる能力を見極める [H]  |
|                         | 食べたいものを食べられるように意向とリスクを共有する                        | 入所者が表明した意向を多職種と情報共有する [D]<br>入所者の食べることを叶えるために家族に入所者の想いとリスクを伝え、納得のいく説明を行う [E]  |
| 食べたいものを食べられるように段取りをつける  | 好きなものを食べることができるよう家族の協力を得る                         | 昔好きだったものを食べることで食べる意欲につながらないか、家族に差し入れてもらう [E]<br>家族の差し入れに対する反応を伝え協力の継続をあおぐ [G]   |
|                         | 食べたいものを食べられるように味や食材の調整をつける                        | どら焼きが食べたいと言われればせめてあんこの方でも食べてもらえるように入所者の希望を可能な限り実現する [C]<br>入所者の希望する食べ物を提供するために食材の入手方法や味付けなど多職種で段取りをする [D]   |
|                         | 食べたいものを食べられるように食形態の工夫を凝らす                         | 好きなラーメンを継続して食べることができるよう麺をやわらかくし長さを工夫した [E]<br>大好きなお酒を味わってもらえるようにとろみをつけた日本酒を口に含ませる [H]   |
|                         | 食べることを継続できるように多職種と連携する                            | 食べる能力や食欲に合わせて食べやすい形態や量を介護・厨房と相談をする [A]<br>向精神薬による嚥下機能への影響も踏まえ嘱託医に相談し可能であればなくしていく [H]<br>全部食べさせないといけなと思わないように介護士に声をかける [B]<br>生活全般を支える介護職を全力サポートする立場で食欲に影響する排便コントロールの相談に乗る [H] |
| 施設の日常とは異なるひとときを演出する     | 家庭での生活を思い出せる食事を提供する                               | 懐かしさが感じられる食事を提供する [C]<br>入所者の家庭の味を意識してお茶の時間に煮しめやお浸しを提供する [E]  |
|                         | 特別感を感じてもらえるように好きな食べ物や茶器で演出する                      | 煎茶と饅頭で少し高価なものが好きだった方に、急須とかを用意して演出した [D]<br>入所者の食べた内容から好きなものを推測し特別メニューとしてあんこを提供する [H]  |
| 状態に応じた食事をニーズに沿って提供する    | 心身の負担に配慮して形態や量を調整する                               | 食事摂取による身体への負荷を考慮して食形態や量を調節する [C]<br>食事を残すことに申し訳なさを感じることがないように食べられる量に応じて提供する量を減らす [H]  |
|                         | 食べたい気持ちに応え最期まで食事を提供する                             | 最期まで食べたい気持ちに応じて食事をお出する [H]<br>食べたい気持ちに応じて最期まで食べたいものを提供する [H]  |
|                         | 好きな味わいを何らかの形で感じてもらう                               | コーヒーやはちみつを使用した口腔ケアを通して少しでも風味を感じてもらえるような工夫をする [F]<br>好きだった甘い飲み物を提供し、飲めなくても口に浸して甘さを感じてもらおう [H]<br>入所者の嗜好に合わせてコーヒーを豆から挽いたり煮しめを口の傍に持っていく入所者が食べ慣れたものの香りを感じてもらえるように関わる [F]          |
| 好きな味わいを何らかの形で感じてもらう     | 食べたい気持ちを尊重して食事を提供し、たとえ食べることができなくても目で匂いで感じてもらう [H] |   |



まして。急須とか用意をして食事というよりも煎茶と饅頭とかを〔D〕のように、入所者の好きな食べ物や茶器を準備し特別感を感じてもらおうことで食べる意欲につなげる実践を行っていた。

#### 6) 【状態に応じた食事をニーズに沿って提供する】

##### (1) 〈心身の負担に配慮して形態や量を調整する〉

「心臓が弱ると食べることがつらくなる（中略）そういう方には食べる形態や量を考えて〔C〕や「(入所者は)残すことに関して申し訳なさもあるのでおにぎりを小さくして量を少なくして全体的に量を減らして〔H〕」のように、入所者の身体面や精神面の負担も考慮し形態や量を調整して提供する実践を行っていた。

##### (2) 〈食べたい気持ちに応え最期まで食事を提供する〉

「少しずつ食べれなくなっていたけど本人さんは食べたい気持ちがあり、食事は最期まで用意して〔H〕と、食べることが難しくなったとしても入所者の希望に応じて食事を提供する実践を行っていた。

#### 7) 【好きな味わいを何らかの形で感じてもらう】

##### (1) 〈口の中を潤す程度に好みの味を感じてもらう〉

「最期は甘い飲み物が好きだったので甘めの紅茶をすすめてみたり。飲めなくても浸すだけでも甘さを感じてもらって〔H〕と、経口摂取が難しくても好きだった味を感じてもらおう実践を行っていた。

##### (2) 〈好きな食べ物の風味を味覚以外の感覚で感じてもらう〉

「ご飯が大好きでとにかく苦しくても食べたくて。（中略）食べたい気持ちがあればお膳を目の前に出して。匂いでも感じてもらえれば〔H〕と、入所者が食べることはできなくても食べたいという想いを汲み取り味覚以外の感覚で感じてもらう実践を行っていた。

きな食べ物や味わえるように丁寧に把握し続ける】看護を行っていた。熟練看護師は入所者の嗜好が変化する可能性を踏まえ経時的に入所者の好きなものを丁寧に把握し続けることで好きな食べ物を味わってもらおう実践につなげていたと考える。

看取り期では加齢に伴う身体機能の低下に加え呼吸苦等の苦痛も伴うことが多く、その中で食事はエネルギーを消費する活動でもある。看取りの経過の中で熟練看護師は食べる機能の低下を捉えながら全身状態をアセスメントし【食事が摂取できるかどうかその都度見極める】実践を行っていた。極めて重い嚥下障害のある高齢患者の摂食援助に対して看護師は口から食べる喜びを感じてもらいたいという気持ちと誤嚥による苦痛と生命の危険を避けたいという気持ちが同時に起こり迷いや葛藤が生じており<sup>8)</sup> 看取り期では更に迷いや葛藤が生じやすいと言える。熟練看護師は誤嚥により生命の危険が生じるというリスクを負いながら食べる能力を適切に評価すると同時に、その都度食べる限界を見極めていた。この実践は、熟練看護師が患者にとってのリスクと利益は何かを思考する<sup>9)</sup> ことと共通すると考えられる。熟練看護師は長年培ってきた臨床判断の中でリスクと利益を考量し食べる限界を見極めながら食べることを叶える実践をしており、このことが熟練看護師の看護実践の特徴ではないかと考える。

そして、熟練看護師は食べる能力を見極め【食べたいものを食べられるように段取りをつける】、【食べることを継続できるように多職種と連携する】実践を行っていた。特養の看護実践では、入居者・家族との関係性を築き多職種と効果的に協働することで入居者の想いや状態を的確にとらえ対応していく<sup>10)</sup> ことが明らかになっており、熟練看護師は家族や多職種と連携・協働することで看取り期の食事支援を支える実践をしていると考えられる。

熟練看護師は、入所者の背景を意識し昔ながらの食べ物・家庭的な味を提供できるように調整し【施設の日常とは異なるひとときを演出する】ことで単調になりがちな生活に刺激を与え、食べたい気持ちや食べる能力を引き出し満足感を高めようとしていたと考える。そして【状態に応じた食事をニーズに沿って提供する】実践では、希望に応じ最期まで食事を提供する実践も明らかになった。特養入所者にとっての食事は自分の生命と直接つながっているもの<sup>3)</sup> であり、継続して食事を準備することで入所者に安心を感じてもらおうとしていたと考える。さらに、経口摂取ができなくても【好きな味わいを何らかの形で感じてもらう】ことは入所者の尊厳を守り最期まで生を全うするための重要な支援の一つである

## V. 考 察

### 1. 特養熟練看護師の看取り期における食事支援

特養は入所者の生活の場であると同時に人生の終焉を迎える場でもある。その中で食事は生と結びついており<sup>3)</sup> 入所者の意向を尊重しながら関わっていく必要がある。前期高齢者への調査で食嗜好が変化した要因は加齢が最も多く<sup>7)</sup> 食の好みは一様ではないことが示唆されている。本研究では、熟練看護師は介護職の情報だけでなく家族への確認や入所者の状況を確認しながら【好

と考える。入所者が好きな味を味覚以外でも感じることは、大切にされているという自尊感情も得られQOLを高めることにもつながると考える。

## 2. 看護への示唆

本研究において、特養の熟練看護師の看取り期における食事支援には、その都度食事が摂取できるかどうか見極めながら食べたいものを食べられるように関わる看護実践があった。特養看護師は、看取り期においても入所者の意向に沿った食事支援ができるように多職種で連携しながら調整機能を果たすことが必要であると考え。また、本研究では入所者の意向に沿いながら食べる限界を見極める実践が導き出された。アドバンスケアプランニングと看取りケアは特養看護師が受講したい研修の上位にあり<sup>5)</sup> 熟練看護師の経験知から生み出された食べる限界を見極める実践について看取り期の食事支援に関する研修体制を整えていくことが看取り期にある特養入所者への食事支援の一助になると考える。

## 3. 研究の限界と今後の課題

本研究は特養熟練看護師8名の語りから生成されたという限界はあるが看取り期にある特養入所者の食事支援における熟練看護師の看護実践が抽出できたと考え。今後は対象者数を増やし新たな熟練看護師の看護実践を見出し検討を重ねることでケア方法の開発、ケアの一般化を目指す必要がある。

## VI. 結 論

看取り期にある特養入所者への食事支援における熟練看護師の看護実践として、【好きな食べ物を味わえるように丁寧に把握し続ける】、【食事が摂取できるかどうかその都度見極める】、【食べたいものを食べられるように段取りをつける】、【食べることを継続できるように多職種と連携する】、【施設の日常とは異なるひとときを演出する】、【状態に応じた食事をニーズに沿って提供する】、【好きな味わいを何らかの形で感じてもらう】の7つのカテゴリーが抽出された。そして、入所者の意向に沿いながら食べることを叶えつつも食べる限界を見極める実践が必要であることが示唆された。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり快く面接に応じてくださ

いた対象者の皆さま、関係者の皆さまに深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 厚生労働省. 令和2年介護サービス施設・事業所調査の概況. [https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service20/dl/kekka-gaiyou\\_1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service20/dl/kekka-gaiyou_1.pdf). (アクセス日 2022.10.27).
- 2) 全国老人福祉施設協議会. 看取り介護指針・説明支援ツール:平成27年度介護報酬改定対応版:平成26年度/特別養護老人ホームにおける看取りの推進と医療連携のあり方調査研究事業. <https://mitte-x-img.istsw.jp/roushikyo/file/attachment/304137/mitori-kaigo-shishin.pdf>. (アクセス日 2022.9.16).
- 3) 小楠範子. 高齢者の終末期の意思把握としての回想の可能性. 日本看護科学会誌 2008;28(2):46-54. doi: 10.5630/jans.28.2\_46.
- 4) 上村聡子, 山内恵美, 佐瀬美恵子, 他. 特別養護老人ホームにおけるターミナル期の食事援助の様相: ケアカンファレンス記録に見る看護師の役割. 甲南女子大学研究紀要 2011;5:107-117.
- 5) 日本看護協会. 介護施設等における看護職員のあり方に関する調査研究事業報告書. [https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/report/2021/aged\\_health2021.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/report/2021/aged_health2021.pdf). (アクセス日 2022.11.1).
- 6) 藤内美保, 宮腰由紀子. 看護師の臨床判断に関する文献的研究: 臨床判断の要素および熟練度の特徴. 日本職業・災害医学会会誌 2005;53:213-219.
- 7) 富永一道, 土崎しのぶ, 濱野強, 他. 食嗜好の変化の認識と客観的要因の比較検討: 前期高齢者における検討. 口腔衛生学会雑誌 2020;70(3):136-143.
- 8) 米村礼子, 堤雅恵. きわめて重い嚥下障害のある高齢患者の摂食援助に対する看護師の考え方: 紙上事例を用いて. 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌 2015;19(2):127-135.
- 9) 木村恵美子, 城丸瑞恵, 仲田みぎわ. 終末期がん患者の安全性と安楽性を考慮した日常生活援助に対する熟練看護師の思考. 日本看護技術学会誌 2020;19:104-112. doi: 10.18892/jsnas.19.0\_104.
- 10) 笹谷真由美, 長畑多代. 特別養護老人ホームにおける看護実践能力の概念分析. 大阪府立大学看護学雑誌 2017;23(1):39-49.

(受付 2022年9月26日)